

令和5年度第4回 感染症発生動向調査部会

令和5年7月19日

月番： 大西 秀典（感染症全般）、大野 元（STI）

1 前月の感染症発生動向について（2023年第22週～26週・6月）

<全数把握対象疾患>

（感染症全般）

- ・ 一類感染症については、発生報告は無い。
- ・ 二類感染症については、結核は今月の報告数は23例で、2019年の同期累計報告数183例、前年の同期累計報告数144例、本年の累計報告数が121例となっており岐阜県下においてはCOVID-19流行後の発生減少が継続している。従来通り基本的には高齢者が多いが、20、30、40歳代の若年層にも散見される。
- ・ 三類感染症については、腸管出血性大腸菌感染症が3例発生報告があったが、そのうちO157の発生が2件確認された。
- ・ 四類感染症については、A型肝炎が2例、レジオネラ症が13例報告されている。
- ・ 五類感染症（性感染症以外）については、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症が1例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症が1例、侵襲性インフルエンザ菌感染症が3例、侵襲性肺炎球菌感染症が3例、破傷風が1例、百日咳が2例報告されている。

（STI）

- ・ 梅毒は早期顕症10例及び無症候5例が報告された。その本年累計は67例で、過去最高の報告数となった前年の同期累計（47例）と比較しても142.6%と、増加傾向がみられる。

<定点把握対象疾患>

- ・ 新型コロナウイルス感染症、RSウイルス感染症、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナの流行が目立つ月であった。
- ・ 新型コロナウイルス感染症の今月の報告数は2,831例であり、定点把握対象疾患となって以降ほぼ毎週のように報告数が増加している。
- ・ インフルエンザの定点当たり患者報告数が2.8となっており、一般的な流行期ではない6月であるにも関わらず発生がみられている。岐阜圏域においては25週においても定点当たり1.0を超えていたが、26週にはようやく減少した。
- ・ RSウイルス感染症は県全体での発生数1,121例、前月比277.6%と増加傾向である。
- ・ 咽頭結膜熱は県全体で107例の発生があったが、前月比91.1%と若干減少傾向である。
- ・ A群溶血性連鎖球菌咽頭炎は356例があり、前月比180.3%と増加傾向である。
- ・ 感染性胃腸炎は1,452例の発生があり、前月比としては88.1%と減少傾向であるが、前年同期比159.0%で昨年よりは発生が多い。年初めは全国平均を大きく下回っていたが、同レベルの発生数まで増加してきている。
- ・ 手足口病は93例の発生があり、前月比826.7%と夏場に向けて急激に増加傾向である。

- ・ 突発性発疹は 74 例の報告があり、前月比 126.0%と若干増加傾向である。
- ・ ヘルパンギーナが 651 例の発生があり、前月比 2367.3%と夏場に向けて急激に増加傾向である。
- ・ 基幹定点疾患では目立った調査対象感染症の流行はみられていない。

2 検討すべき課題

- ・ RS ウイルス感染症の流行について
- ・ ヘルパンギーナの流行について

3 情報提供（月番委員専門分野から）

- ・ 岐阜県内の新生児マススクリーニング追加検査受検者が 85%を超えました。重症複合免疫不全症患者を重篤な感染症の発症前にみつけることができる検査なので積極的に検査を受けていただきたい。
- ・ 今年度の日本小児感染症学会学術集会(第 55 回)は 2023/11/25-26 に名古屋国際会議場での開催です。

4 その他（感染症対策推進課から）

- ・ 岐阜県感染症予防対策協議会（感染症発生動向調査部会）の今後の進め方について
- ・ 県内の感染症流行状況（警報レベル）に関する公表の検討について
- ・ 梅毒注意喚起情報の県ホームページへの掲載について
- ・ オズウイルスによる心筋炎と診断された患者の報告について

<検討結果>